

## フランツォーベル朗読会報告

山本浩司

秋の朗読会のゲストは作家フランツォーベル(筆名)。オーバーエスタライヒ州フェックルアブルック生まれの38歳、バッハマン賞やネストロイ賞など国内の重要な文学賞を取っており、オーストリア文学の将来を担う中堅と言ってよさそうだ。ウィーン・グループなどアヴェンギャルドの伝統につながる言葉遊びを得意とし、ネストロイやライムントら民衆劇の系譜で論じられることも多い。糞尿譚などの下ネタが混じってくるのもこの伝統の直系にいる証拠だが、戦後文学的な「挑発」よりも笑いをとることに主眼があるようだ。

東京で二回目の朗読会ということもあるのか、フランツォーベルは聴衆に気を使いゆっくり読んでくれたが、そのぶん本来の生命であるスピード感が犠牲にされた感はある。朗読されたのは、『Die Reise in den Himmel』、小説『Lusthaus oder Die Schule der Gemeinheit』(2002)と最新の大作『Das Fest der Steine oder Die Wunderkammer der Exzentrik』(2005)からいくつかの断章(「The Big Blowout」など)である。最新作はバラバラに解体しそうな作品をまとめあげる力量が光るらしいが、この大作につながる側面に力点が置かれたぶん、フランツォーベルという多面体のうち、文明批判などやや硬派な一面のみが切り取られた印象がある。具体詩につながる作品やお下劣な作品があまり取り上げられなかったのが惜しいといえ、惜しかったが、詩集『Lunapark』(2003)から取り上げられた「Der Sinn」や「Österreich ist schön」では、その片鱗ものぞけ、全体としてはバランスのとれた朗読会だったと言えるだろう。

朗読に引き続いて半時間ほどの質疑応答の時間が取られた。質問は創作に及ぼす旅の効用について。カフェよりもベッド(「一番小さい故郷」)で書くことを好むらしいが、ウィーンでは人と会ったりせねばならず落ち着かないのに、外国では集中できるし「異質なまなざし」を獲得することで固有のものへの見方も変わる、という。オーストリアの作家であるということの自覚について。日常生活ではほとんど意識しないが、オーストリア語のダブルバインドなところは、言語に対するアイロニカルな姿勢を研ぎすますらしい。

ツーリズム批判が込められた短編「天への旅」にかかわって、先輩作家エルフリーデ・イエリネクの『アルプスにて』との親近性が指摘され、二人の違いはユーモアのあるなしにあるのか、という質問がでたのに対しては、フランツォーベルは連想を重視する文体にかなり共通点があることは認めつつ、イエリネクの世代のもつ政治的意識の高さや真実というクリッセに対しては距離がある、とした。その際、東京都立大学のルプレヒター教授から、ORFが制作したポートレートフィルムの中かで、ウィーンのフォルクステアターの演出家が、イエリネクがマテリアルを提示して演出家に残りをすべて委ねるのに対して、フランツォーベルは真の劇作品を書いている、と答えたインタビューがあるとの補足的説明もあった。さらに小説でも登場人物がきちんと造型されている点があげられた。

また具体詩の朗読会を茶化するような詩「Der Sinn」には、アヴァンギャルドの伝統に対する批判的距離が読み取れるのではないかと、という問いかけがあったが、フランツォーベルは、ダダイスム、ウィーン・グループ、ヤンドル（「最初のモダン」）、プリースニッツ（「最初のヒーロー」）の重要性を言いつつも、彼らに対して距離を取ることの必然性も説明してくれた。もっとも、この詩のことはすっかり忘れていた、と言葉を濁したのではあるが。

さらに、オーストリア文学におけるオーストリア批判というトposについて、オーストリア人の聴衆を含めて活発な議論が交わされた。「今やオーストリアはあまりに小さいから、誰もまじめに受け取らない」というフランツォーベルの認識は、例えばバッハマンが『マーリナ』の架空インタビューのなかで「歴史から降りた国」と評しているのにも近い。ただしフリッチュ（『謝肉祭』）やインナーホーファー（『美しき日々』）らいわゆる「反郷土文学」、あるいはイエリネクやベルンハルトらの毒のある文学と比べてみると、諷刺の刃も今や戦うべき敵を見失って、虚しく空を斬っているかの印象も禁じえない。とはいえ、彼よりももっと若い世代が世界的に流行するネオリアリズムの洗礼を受けて、オーストリア文学の言語批判的な伝統から断絶しはじめている様子を見ると、遅れてきた前衛フランツォーベルの道化師のような立場も理解できるというものだ（事実、件のポートレートフィルムでは道化の王の役を演じていた）。

終了後は、慣例どおり、早稲田通り沿いの居酒屋『かわうち』で懇親会が盛大に催され、報告者は残念ながら最後を見届けられずに失礼したが、宴は例によって果てしなくつづいたようだ。

(2006年11月7日18:00～ 早稲田大学文学部第7会議室にて)